

説教

義認：選ばれし者達

OIC の皆さんお早うございます。

義認とは、私たちはもはや罪がなく、イエスの十字架上の死に基づいて義とされ、私たちの永遠の赦しを買い取ったという神の宣言です。私たちの赦しは、神の計画に従っています： 時が始まる前 - 時の中で - 時が過ぎ去った後も赦しは有効です。今日のメッセージでは、時が始まる前から、私たちクリスチャンが “選ばれし者” であることをどのように確信できるかをお話したいと思います。

聖書の中で、イエスは「わたしは道であり、真理であり、命である。そして (ヨハネ 3 章 3 節) のようにも言われました。： 「イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」」

イエスは**真実**です。もちろん、イエスが語られた言葉はすべて**真実**です。イエスは、ご自分の言葉を強調するためこう言われたのだと思います。それはイスラエルがそうであったように、東洋的な文化ではなく、もっと彼らに分かる直接的な表現で言うようなものです。「私はあなたたちを愛しているが、あなたたちはしばしば私に注意を払わない。私の愛する子供たちよ、よく聞きなさい。」

さて、使徒パウロも主人であるイエスの大きな足跡をたどりながら、同じように自分の故郷の家族であるイスラエルについて深い心を表現しています。

(ローマ 9 章 1-3 節)： 「私はキリストにあって真実を言い、偽りを言いません。次のことは、私の良心も、聖霊によってあかししています。2 私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。3 もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。」

パウロは、イエス・キリストとその十字架につけられたキリストを、そのために支払わなければならない代価にかかわらず、宣べ伝えることに完全に身を投じています。彼は救い主と親しく歩んでいますが、(ローマ 9 章 1 節) で「私の証人としてのキリスト」と宣言し、「良心と聖霊」とも宣言して、次の発言を強く確認しています。イエスが聴衆に注意を喚起するために語られた時のように、パウロは(ローマ 9 章 3 節) で非常に感情的で物議を醸す発言を文章にしようとしています。

信者にとっての良心とその重要性について一言：

ギリシャ語の新約聖書では、良心という言葉（syneidēsis）には次のような意味があります：

「現在の考え、持続する観念、現実の印象」

「持続する観念」とは、神が私の考えを正すために、継続して働く良心です。 クリスチャン、特に新しく生まれ変わった人たちは、今や律法のもとから解放されています。 しかし、真の良心を教えてくれる聖霊をイエスに祈り求めるべきです。 驚くべきことに、新しく生まれ変わった際、神は人によって異なる「人間の良心」を排除されません。 信じがたいことですが、「罪人」はクリスチャンよりも、主イエスのことをまったく知らないが、自分の良心を自覚しているかもしれません。 正直なところ、私、ブルース牧師は、このことに大いに悩んだことを正直に語っています。「イエスと十戒がそれを罪と呼ばなかったなら、私は自由だ！ 罪と呼ばれないことなら、何をしても自由だ。」と。しかし、私は間違っていました！ 私が尊敬しているクリスチャンの先生がある本で、異教徒でありながら非常に宗教的な社会であったアメリカン・インディアンが、クリスチャンにとっての「良心」をうまく表現していると教えてくれました。 良心と戦うことは、「四角い釘を丸い穴の中に入れる」ようなものだ！と。神は、この「しつこい観念」を繰り返し思い出させ、イエスに尋ねるように仕向けます。 イエスの御霊はこれを受け止めて、私に新しいレッスンを始めました。自分の良心が何であるかを知る前に、サタンが私の良心であるかのように振る舞おうとしていることに気づいていました。そしてまた、欲しいものを手に入れたいという私の欲望は、しばしば自分の良心に反していました。繰り返しますが、OICの皆さん、「良心」に関する聖書の教えは（ローマ人への手紙 14 章）までお待ちください。 このように、良心の重要性は、パウロによって（1 節）で聖霊と並置、あるいは真横に置かれています。

（ローマ 9 章 2 - 3 節）：「**2** 私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。**3** もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願っていたのです。」

この使徒が、イスラエルへの重荷、苦い悲しみ、尽きることのない悲しみを心に抱きながら、「主の喜び」の力に生きることができたのは驚くべきことです。 パウロは、地上でしばしば栄光の味を味わい、イエスに「再会」するときには、さらに大きな栄光が自分のものになると信じていたからです。不完全な聖人として、この地上で「キリストのための苦しみ」を全うすることは、イエスに私たちの重荷を担っていただくことを学ぶことです。パウロにそうしてくださったのだから、あなたにもできるはずです！

それで彼らが救われるなら、私はキリストから切り離され、永遠に呪われることを厭わない。パウロは（ローマ 8 章）で、義と認められたクリスチャンの「安全」について書いたばかりでした。パウロは、イスラエルと全世界のために十字架上で死なれたイエスと同一視しています。パウロの感情的な重荷は理性を超えていました。

さて、パウロは“信仰を守る”という責任を忘れたクリスチャンではありませんでした。彼は、救いの賜物とは、この世の生活を超えていました。人間には信じられないような、しかし神からの真の賜物であることを知っていました。それは、救いを受けた者が、救いを神に感謝するために、愛すること、愛の行いをするに心を動かす贈り物です。これは見返りではなく、愛による見返りであり、他者への愛です！そこには大きな違いがあります。パウロはそのように生きたのです。（ローマ 8 章 30b 説/NASB 1995）で学んだように、神が自分を保ってくださることを本当に信頼していました。同時に……そう、彼の態度は（1 コリント 9 章 26-27 節）によく示されています。：「ですから、私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしてはいません。27 私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。」パウロは知っていました！イエスの死を彼らの過越の小羊として信じることだけが、彼らを救うことができるのです。

教訓その1

神は、使徒パウロのように、神のしもべたちに人間には手に負えない重荷をお与えになることがあります。クリスチャンは、つぶやいたり不平を言ったりする言い訳として、「私はただの人間だ」と言うてはいけません。彼らはすでに神の子であり、神の子となりつつあるのです。彼らの内におられる神の霊は、栄光に包まれたイエスに歓迎され、ゴールに到達するという確信を新たにしています。重荷はなくならないかもしれませんが、パウロがイスラエルのために重荷を負ったように、私たちクリスチャンも重荷の一部を負うことができます。なぜなら、私たちの内におられるキリストの霊が、人知を超えたところで、イエスが約束されたことを起こさせるからです：（マタイ 11 章 30 節）：「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

（ローマ 9 章 4-5 節）：「彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契約も、律法を与えられることも、礼拝も、約束も彼らのものです。5 先祖たち（アブラハム、イサク、ヤコブ）も彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。このキリストは万物の上であり、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。」

イスラエル人であるパウロの母国は、政治的な意味での愛国主義を推進する国ではありませんでした。しかし彼は、1000 年以上前のダビデ王の治世と同じように、神を王とする国、イスラエルの希望とともに成長しました。そのような王を望んでいたパウロは、聖書を知っていました。

（使徒 13 : 22）：「『わたしはエッサイの子ダビデを見いだした。彼はわたしの心になつた者で、わたしのこころを余すところなく実行する。』」（1 サムエル 13 章 14 節より）

さて、パウロはイスラエルが神の寵愛を受けていることの多くの利点を挙げています。彼らは神によって選ばれ、アブラハムから子孫を造られました。神は彼らと、特に彼らの父アブラハムと法的な契約を結びました。これがまさに第一の旧約、すなわち信仰の契約でした。(創世記 15 章 5 - 6 節) : 「5 そして、彼を外に連れ出して仰せられた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる。」6 彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」

パウロは、このようにクリスチャンが義とされるのは、キリストが私たちの当然の罰を自ら受けてくださったことを信じる信仰によるのであって、行いによるのではないと説明しました。アブラハムは義と認められました。

(ローマ 4 章 3 節) を見てみよう。 : 「聖書は何と言っていますか。『それでアブラハムは神を信じた。(神は)それが彼の義と見なされた。』とあります。」

(創世記 17 章 3-5 節) : 「アブラムは、ひれ伏した。神は彼に告げて仰せられた。 4 わたしは、この、わたしの契約をあなたと結ぶ。あなたは多くの国民の父となる。 5 あなたの名は、もう、アブラムと呼んではならない。あなたの名はアブラハムとなる。わたしが、あなたを多くの国民の父とするからである。」

パウロはまた、アブラハムの信仰生活に従った他の二人の家長、あるいは指導者たちについても言及しています：アブラハム、イサク、ヤコブです。主は、エジプトのファラオの手から彼らを救い出す際に、栄光の不思議を彼らに示されました。主はまた、ダビデの息子ソロモン王が建てた神殿が神に捧げられた日、その栄光で満たされました。神はモーセとの密接な関係を通して、彼らに律法を与えられました。彼らが主に反抗し、主の預言者たちを殺害した後も、主はご自身の約束を受け取るために、国を維持するために、滅ぼされることのないように人々を残しました。そして、パウロの心には、“イスラエルがイエスをメシアとして受け入れてさえいれば、どうなっていたらう！”という思いがあったに違いありません。彼は、キリスト自身も人間性に関してはイスラエル人であったことを含め、イスラエルにおける信仰者の子孫を列挙しています。パウロは、イスラエルが待ち望んでいた王をどのように拒み、十字架につけたかを誰よりもよく知っていました。パウロの次の言葉は、イエスがイスラエル人以上の存在であることを明らかにしています。そして彼は神であり、すべてを支配し、永遠の賛美に値する方なのです！アーメン。

(ローマ 9 章 6-8 節) : 「しかし、神のみことばが無効になったわけではありません。なぜなら、イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではなく、7アブラハムから出たからといって、すべてが子どもなのではなく、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる。」のだからです。8すなわち、肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、約束の子どもが子孫とみなされるのです。」

(ローマ 9 章 6 節) 「しかし、神のみことばが無効になったわけではありません。なぜなら、イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではなく、いいえ…」 神はイスラエルとの約束を忠実に明らかにされました。パウロが個人的に残念に思っているのは、自分の民族を愛するがゆえに、イスラエルは自分たちの救いのために、メシア・イエスへの信仰ではなく、自分たちの肉体的な血統に頑なにしがみついたことでした。

(ルカ 3 章 8 節) でイエスはユダヤ人たちにこう言われた: 「それならそれで、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの先祖はアブラハムだ。』などと心の中で言い始めてはいけません。よく言うておくが、神は、こんな石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことができになるのです。」

(ローマ 9 章 8 節): 「すなわち、肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、**約束の子どもが子孫とみなされるのです。**」パウロは今、(ローマ 2 章 28-29 節) の教えに戻って、真の霊的イスラエル、神に受け入れられる地上の唯一のイスラエルは、今やクリスチャンであると言っています。クリスチャンは、ユダヤ人も異邦人も、イエスへの信仰によって神のひとり子となります。イエスは、いのちのパンとしての肉体の犠牲について次のように言われました。(ヨハネ 6 章 50-51 節): 「しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことがないのです。 **51** わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」そして、弟子たちに、真の犠牲であるご自分の肉体をも超えて、ご自分を信じるすべての人に信仰の賜物を与える神の霊によってのみ影響を受けるご自分の犠牲の恩恵に目を向けるようチャレンジしたのです。

(ヨハネ 6 章 61-64 節): 「しかし、イエスは、弟子たちがこうつぶやいているのを、知っておられ、彼らに言われた。「このことであなたがたはつまづくのか。 **62** それでは、もし人の子がももいた所に上るのを見たら、どうなるのか。 **63** いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話したことばは、霊であり、またいのちです。 **64** しかし、あなたがたのうちには信じない者がいます。」——イエスは初めから、信じない者がだれであるか、裏切る者がだれであるかを、知っておられたのである。——」 こうしてパウロは、アブラハムから永遠の王国に至る血統は、もはや「肉体的な」イスラエルには属さず、キリストの霊を内に持つ人々だけに属するのだと、イエスが言われたことを実際に再述しているのです。

(ローマ 9 章 9 節): 「**約束のみことばはこうです。「私は来年の今ごろ来ます。そして、サラは男の子を産みます。」**」 私たちの神が、神に選ばれた私たちに対してどれほど素晴らしいお方であるかを示したいと思います。創世記の 17 章では、主がアブラハムに男の子を授けると約束さ

れたばかりなのに、アブラハムの反応は、信仰の父である主が期待されるほどのものではありませんでした。

(創世記 17 章 16 - 17 節) : 「**16** わたしは彼女を祝福しよう。確かに、彼女によって、あなたにひとりの男の子を与えよう。わたしは彼女を祝福する。彼女は国々の母となり、国々の民の王たちが、彼女から出て来る。」 **17** アブラハムはひれ伏し、そして笑ったが、心の中で言った。「百歳の者に子どもが生まれようか。サラにしても、九十歳の女が子を産むことができようか。」」主に向かって頭を下げ、信じられないと笑う。すべてのことをご存知で、時間の上にまでおられる神との密接な関係の中にいるとき、私たちは決して「自分だけのため」に何かをすることはできません。そして、いわば常に最後の言葉を得る主は、**(創世記 17 章 19 節)** でこう言っています。 : 「すると神は仰せられた。「いや、あなたの妻サラが、あなたに男の子を産むのだ。あなたはその子をイサクと名づけなさい。わたしは彼とわたしの契約を立て、それを彼の後の子孫のために永遠の契約とする。」アブラハムの妻は夫よりも良いことをしようとはしませんでした。というのは**(創世記 18 章 1 節)** で主が現れたからです。「主はマムレの櫪の木のそばで、アブラハムに現われた。」この人たちは、アブラハムが主人と認めた三人の人たちです。**(創世記 18 章 10-15 節)** : 「するとひとりが言った。{私は、三人の天使だと思うが、アブラハムは主の御名が彼らの上にあるのを感じた。}「わたしは来年の今ごろ、必ずあなたのところに戻って来ます。そのとき、あなたの妻サラには、男の子ができています。」サラはその人のうしろの天幕の入口で、聞いていた。

11 アブラハムとサラは年を重ねて老人になっており、サラには普通の女にあることがすでに止まっていた。 . **12** それでサラは心の中で笑ってこう言った。「老いぼれてしまったこの私に、何の楽しみがあろう。それに主人も年寄りで **13** そこで、主がアブラハムに仰せられた。「サラはなぜ『私はほんとうに子を産めるだろうか。こんなに年をとっているのに。』』と言って笑うのか。 **14** 主に不可能なことがあろうか。わたしは来年の今ごろ、定めた時に、あなたのところに戻って来る。そのとき、サラには男の子ができています。」 **15** サラは「私は笑いませんでした。」と言って打ち消した。恐ろしかったのである。しかし主は仰せられた。「いや、確かにあなたは笑った。」」

これらはパウロが書いた以上の詳細だが、ユダヤ人なら誰でもこれらの事実をすべて知っていました。私が言いたいのは、私たちの信仰の父と母は、神が計画された血統の子孫の超自然的な誕生を約束されたとき、主を笑ったということです。神は、神の超自然的な愛の行為に対する私たちの信仰がどれほど乏しいかを知っておられるのです。預言者エレミヤのように、イスラエルで王に迫害され、大きな苦境に立たされている私たちは、アブラハムとサラに対する神の誠実さを見ることができます - **(哀歌 3 章 21-23 節)** : 「私はこれを思い返す。それゆえ、私は待ち望む。 **22** 私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。 **23** それは朝ごとに新しい。「あなたの真実力は強い。」

(ローマ 9 章 10-13 節) : 「このことだけでなく、私たちの先祖イサクひとりによってみごもったリベカのこともあります。11 その子どもたちは、まだ生まれてもおらず、善も悪も行なわないうちに、神の選びの計画の確かさが、行ないにはよらず、召してくださる方によるようにと、(このメッセージは、神はご自身の目的に従って人を選ばれることを示す。12 神は御自身の民を呼び出されるが、彼らの行いの良しあしではない) 「兄は弟に仕える。」と彼女に告げられたのです。13 「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ。」と書いてある(マラキ 1 章 2-3 節) とおりです。」

使徒パウロはここで、私たちが愛し、私たちのために御子を犠牲にされた神が、すべてを支配する主権者であり、選び主であることを宣言しています。パウロはイスラエルの歴史から、次のような具体例を挙げています(ローマ 8 章 28-30 節/DARBY) : 「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。29 なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。30 神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに**栄光**をお与えになりました。」

単純に読めば明らかなように、パウロは、神がイスラエルに住むユダヤ人の先祖を、彼らが生まれる前から選び、召しておられたことを、すべての人に知ってほしいのだ。

教訓その 2

最初に読むと、(ローマ 9 章) はイスラエルの歴史として独立しているように見えます。しかし、実際には、使徒パウロが、神が選ばれた国イスラエルにおいて(ローマ 8 章 28-30 節)をどのように起こされたかを説明しているのです。神がすべてのことを働かせて益とされたのは、御子の犠牲によって人類を義とする神の主権的な計画を達成するためです。神の全能の力が、選ばれたイスラエルの民、すなわち、**神があらかじめ知っておられ、定め、召し、義とし、栄光をお与えになった人々に、この結果をもたらしたのです。**

(ローマ 9 章 13 節そして マラキ 1 章 2-3 節の引用) : 「私はヤコブを愛し、エサウを憎んだ」(ローマ 9 章)にある神の言葉は、クリスチャンの間に多くの聖書の議論を引き起こしています。エサウがキリストにつながる血統である自分の長子の特権を、一杯のレンズ豆(赤い)スープのために売ることを神が予知していたからこそ、神はエサウを拒んだのでしょうか? もちろん、ヤコブがエサウにあの波乱万丈の「赤いスープの取引」をさせるために策略をめぐらしたことは、神がなぜエサウを憎んだのかではなく、どうしてヤコブを愛することができたのか、という問いに私たちを導くかもしれません。聖書は(創世記 25 章 32-34 節)に悪名高い「スープ取

引」を記録しています。：「エサウは、「見てくれ。死にそうなのだ。長子の権利など、今の私に何になる。33それでヤコブは、「まず、私に誓いなさい。」と言ったので、エサウはヤコブに誓った。こうして彼の長子の権利をヤコブに売った。う。」と言った。34ヤコブはエサウにパンとレンズ豆の煮物を与えたので、エサウは食べたり、飲んだりして、立ち去った。こうしてエサウは長子の権利を軽蔑したのである。」

この二人の双子の兄弟に対する「憎しみと愛」の問題については、Expositors' Bible Commentary (EBC) に有益な説明がありました。EBCは、私がこの聖句の釈義（意味を引き出すこと）においてここで論じた神の予知を、何故考慮していなかったのかについて、私に考えさせます。私が先に述べたように：エサウが自分の長子の特権、つまりキリストにつながる血統を、レンチル（赤い）スープ一杯のために売るという神の予知が、神を動かしてエサウを拒絶させたのでしょうか？その答えを私たちが知ることはないかもしれませんが。しかし、この章（ローマ人への手紙9章）は、救いと義認の計画を完成させるためにご自分の民を選ばれる私たちの主権なる神について多くを語っています。

多くの聖書翻訳が、これらの二人の兄弟のことを「私はヤコブを愛し、エサウを憎んだ」という神の言葉を引用しています。EBCはこう言っている：「ここで（マラキ1章2-3節）を引用することによって、パウロは議論を純粹に個人的なものに見えるかもしれないものから、企業的、国民的 {イスラエル} 生活の平面へと引き上げています。(EBC)。この分析は、“憎む”を“拒む”に置き換えた聖書翻訳の方がよく表現されています。(ローマ9章13節) 神は、イスラエルの信仰の父である父アブラハムの直系の子孫であるエサウの貪欲な心が、長子の特権の大きな価値を大切にしないことを知っておられたと思います。しかし、神の予知については、(ローマ9章11-12節) のパウロのコメントがあります。：「その子どもたちは、まだ生まれてもおらず、善も悪も行なわないうちに、神の選びの計画の確かさが、行ないにはよらず、召してくださる方によるようにと、(このメッセージは、神は御自身の目的のために、神が人々を選ぶことを示している。12 神が人々を読みだすのは、その行いの良しあしではない。)」それゆえ、神の選択の最優先原則は、人々の人生における善悪の業ではありません。全身に赤い毛が生えていたために「エドム（赤い）」と呼ばれたエサウを、神がどのように祝福されたかを見ることも重要です。(創世記36章18節)：「エサウの妻オホリバマの子では、次のとおり。首長エウシュ、首長ヤラム、首長コラである。これらはエサウの妻で、アナの娘であるオホリバマから出た首長である。」

だから神は彼を指導者の父とされました。神が“憎んでいた”人物にすることではないでしょう。彼の名は赤の「エドム」となり、国全体が彼の名にちなんで名づけられました(エドム人)。ここで(EBC)を引用します：「“憎む”というのは、単にエサウが神の選びの目的の対象ではなかったということである。二人の兄弟を用いることの価値は、選民 {「選ばれし者」の

選民}において、神は個人や国が選民となるまで待つことはない、ということを明らかにすることである。神は個人や国家が発展するまで待たず、性格や業績に基づいて選ばれるのである」。(EBC)。

(ローマ 9 章 14-15 節)：「それでは、どういうことになりますか。神に不正があるのですか。絶対にそんなことはありません。 15 神はモーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。」と言われました。」

神が不公平でしょうか？ 神は、私に、あるいは OIC の兄弟姉妹であるあなたにも公平であるよう神に求めることを禁じられています。もし神が公平であれば、(創世記 6 章 5-8 節)にあるように、全人類を滅ぼしているはずで、：「主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。6 それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。7 そして主は仰せられた。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜やはうもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを残念に思うからだ。」8 しかし、ノアは、主の心にながらなっていた。」

もし神が創造における御業の産物である人類を滅ぼしたとしても、神はなお聖なる善なる方であったでしょう。その代わりに、神は世界が始まる前に、人類に救い主を送るというご自身のマスタープランを実行に移されたのです。

イエス誕生の夜、神の天使たちは、ベツレヘム郊外の身分の低い羊飼いたちに輝かしい音楽演奏を披露しました。(ルカ 2 章 13-15 節/CSB)：「すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現われて、神を賛美して言った。 14 「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にながらう人々にあるように。」

15 御使いたちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは互いに話し合った。「さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見て来よう。」

私たちクリスチャンが地上に平和があるのは、神が私たちを寵愛し、イエスの福音を私たちに知らせてくださったからです。神は公平ではなく、憐れみ深い方であることを感謝します。

(ローマ 9 章 15 節)：「神はモーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。」と言われました。」

パウロはここで、神とモーセの会話を引用しています。(出エジプト記 33 章 15-20 節)：「それでモーセは申し上げた。「もし、あなたご自身がいっしょにおいでにならないなら、私たちをここから上らせないでください。 16 私とあなたの民とが、あなたのお心にながらっていることは、いったい何によって知られるのでしょうか。それは、あなたが私たちといっしょにおいでになって、私とあなたの民が、地上のすべての民と区別されることによるのではないのでしょうか。」 17 主はモーセに仰せられた。「あなたの言ったそのことも、わたしはしよう。あなたは

わたしの心にかない、あなたを名ざして選び出したのだから。」18すると、モーセは言った。

「どうか、あなたの栄光を私に見せてください。」19 主は仰せられた。「わたし自身、わたしのあらゆる善をあなたの前に通らせ、主の名（私は有る）で、あなたの前に宣言しよう。わたしは、恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」

モーセや羊飼いたち、そしてユダヤ人と異邦人のクリスチャンたちなど、神が好意的に見てくださる人たちと選ばれた人たちを、神の御言葉がどのように結びつけているのかを私たち全員に知ってほしかったのです。

教訓その1

神は、使徒パウロのように、神のしもべたちに人間に大きな重荷を与えることがあります。クリスチャンは、つぶやいたり不平を言ったりする言い訳として、「私はただの人間だ」と言ってはいけません。彼らはすでに神の子であり、神の子となりつつあるのですから。彼らの内におられる神の霊は、栄光に包まれたイエスに迎えられ、ゴールに到達するという確信を新たにしています。重荷はなくならないかもしれないが、パウロがイスラエルのために重荷を負ったように、私たちクリスチャンも重荷の一部を負うことができます。なぜなら、私たちの内におられるキリストの霊が、人知を超えたところで、イエスが約束されたことを起こさせるからです。（マタイ 11 章 30 節）：「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

教訓その2

最初に読むと、（ローマ 9 章）はイスラエルの歴史として独立しているように見えます。しかし、実際には、使徒パウロが、神が選ばれた国イスラエルにおいて（ローマ 8 章 28-30 節）をどのように起こされたかを説明しているのです。神がすべてのことを働かせて益とされたのは、御子の犠牲によって人類を義とする神の主権的な計画を達成するためです。神の全能の力が、選ばれたイスラエルの民、すなわち、神が予見し、定め、召し、義とし、栄光をお与えになった人々に、この結果をもたらしたのです。

私たちは皆、宇宙の創世以前から神によって選ばれ、救い主の血の分け前や權益を与えられています。どうしてそうなるのか？ 喜べ、そうなのです！

私たち教会は今、“選ばれた者”なのです。イエスの犠牲を信じるために選ばれ、神の愛が私たちに義認を与えました。私たちの罪の問題は、キリストによって十字架で解決されました。私たちは、神の御子イエスによってのみ見出される神の素晴らしい憐れみと分不相応な好意を、全世界に伝えて行きましょう。

私たちの愛の義務は、選ぶことではなく、キリストの福音をすべての国々に宣べ伝えることである。神は、ご自分が選ばれた人々に、その福音を心の底から知ってほしいと願っておられます。

彼らが信じるなら、彼らもまた “**選ばれし者**” であることを知ることができるように、出かけて行って彼らを見つけ、福音を伝えることが、私たちの仕事であり、愛の義務です。

祈りましょう！

REFERENCES

CSB – The Christian Standard Bible. Copyright © 2017 by Holman Bible Publishers. Used by permission. Christian Standard Bible®, and CSB® are federally registered trademarks of Holman Bible Publishers, all rights reserved.

DARBY –Darby Translation , Public Domain

EBC – Expositor’s Bible Commentary (Abridged Edition): New Testament

Copyright 2004.

NLT– New Living Translation *Holy Bible*, copyright © 1996, 2004, 2015 by Tyndale House Foundation. Used by permission of Tyndale House Publishers, Inc., Carol Stream, Illinois 60188. All rights reserved.